

カラチ日本人学校における体育科指導と実践

前カラチ日本人学校 教諭

大阪府豊中市立桜井谷東小学校 教諭 山崎 雅史

キーワード：体育科指導，年間計画，指導内容，クリケット

1. はじめに

日本から遠く離れた南アジアに位置するパキスタン・イスラム共和国。約97%がイスラム教徒であり、イスラム国家としての色彩が強い。パキスタン南部、アラビア海のすぐ傍にあるカラチは、パキスタン最大の都市であり、人々も活気に満ち溢れている。カラチの気候は年間を通して温暖である。5～6月、9～10月は連日40℃を超える猛暑が続く。降水量は少なく、アラビア海が近いので、湿度は高い。

パキスタンの治安は決して良いとは言えない。対米、対アフガン関係の悪化から爆弾テロなどの事件が何度も起きている。また、国内では宗教間の対立が起こり、治安が悪化することが多々ある。このような環境の中で生活をするとなると、当然自由に外で遊んだり、出歩いたりすることができなくなる。もちろん登下校もスクールバスかプライベートカーを利用するため、日常生活での運動量は必然的に少なくなってしまう。

このような環境下で生活を送る子どもたちに本校が行った体育科指導と実践を以下述べていく。

2. 体育科指導の実践

① 年間指導計画

本校の年間指導計画は、4月～10月の前期体育、10月～3月の後期体育、2校時と3校時の間に行う業間体育、そして朝の運動、の大きく4つから成っている。前期体育・後期体育は週1回2コマの実施、業間体育は週1回20分の実施、朝の運動は週4回10分の実施である。本校児童生徒数は12名前後と少ないため、これらの体育科指導は基本的に全校児童生徒で行った。

これらの活動を行うには場所を考えなければならない。本校は小規模校であるため、全校児童生徒が力一杯走り回れるほど広いグラウンドが併設されていない。もちろんプールもない。そこでまず問題となるのが、場所の確保である。子どもたちが十分に運動できる施設かどうか、安全が確保される場所かどうか検討したのち決定となる。前期体育で使用するプールに関しては、これまでホテルのプールを利用させてもらっていたが、2009年度からはホテル自体がテロのターゲットになる可能性があるということで、会員制のスポーツ施設に場所を移し実施した。後期体育で使用するグラウンドは学校近くの公園、クリケット場、サッカーグラウンドなど転々としたが、サッカーグラウンドの定期的な確保が可能となり、そこを利用し実施した。業間体育は広さをあまり必要としないので本校校庭で実施し、朝の運動は校庭のみならず校舎周りを使用し実施した。

② 前期体育

本校の水泳の目標は以下の通りである。

(各学年の達成目標)

- 1・2年生 バタ足、クロール、平泳ぎ (13～50m)
- 3・4年生 クロール、平泳ぎ、背泳ぎ (25～50m)
- 5・6年生 メドレー (クロール、平泳ぎ、背泳ぎ) (75～100m)

中学生 メドレー（クロール、平泳ぎ、背泳ぎ）（75～100m）タイム制限あり

* 3泳法をマスターしたら、より速く泳ぐ練習やバタフライの練習をする。

少人数であるため、習熟度別に分かれ、マンツーマンに近い形で指導にあたった。児童生徒が自分の目標に向かって取り組めるように学習カードの使用や月1回の泳力検定を実施し、目的意識、意欲の向上を図った。

これらの活動を通し、多くの児童生徒が自分の学年よりも上の学年の目標まで達成するに至り、水泳に対して自信を持つことができた。また、泳力検定では友だちが泳いでいる姿に声援を送り、互いに認め合う姿勢も育むことができた。

③ 後期体育

暑さが和らぐ10月～3月の期間に実施した。10月は11月の日本人会運動会に向けて、団体演技（表現）や長縄8の字跳び、リレーなどの練習を行った。それ以後の内容は運動に広さを必要とする内容、陸上運動、ボール運動を中心に実施した。陸上運動では、短距離走、ハードル走、投の運動、跳の運動などを、ボール運動では、ベースボール型ゲーム、ゴール型ゲームなどを実施した。全校児童生徒が行うということで、場の設定やルールなど学年や実態に応じて変えながら実施することで学年のめあて、個人のめあてを持って取り組むことができた。後期体育でも前期体育同様、月1回程度の記録会（チャレンジタイム－50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、持久走）を実施し、児童生徒の目的意識・意欲の向上を図った。

陸上運動では、自分の記録を見つめ自己ベストを出そうと練習に励む姿や自己ベストを出した時の達成感など多くの成果を得られることができた。また、運動会で行う長縄8の字跳びでは、低学年も同じチームに入りながら、1分間に100回前後も跳べるほど上達することができた。

④ 業間体育

あまり広さを必要とせず、前期体育・後期体育では学習していない内容を扱った。器械運動（マット・鉄棒・跳び箱）や体づくり運動、他にも一輪車や竹馬、縄跳びなど幅広く実施し、バランスのとれた運動能力の育成を目指した。業間体育では、学年がそのまま習熟度になっている運動が多かったため、ほとんどの運動は学年別に指導にあたった。

学年別に行っているため、他の学年がどのようなことに取り組んでいるのか、ということがわからないため、どの内容も最後には発表会を開いた。低学年は高学年の発表を見て、技の種類を知ったり、技の難易度を知ったり、高学年は低学年の頑張りを認めたりすることで、お互いを認め合う姿勢を育むことができた。

⑤ 朝の運動

週4回登校後すぐに5分間走を行うという取り組みである。これまで述べてきたように運動するには適しているとは言い難い環境で生活をしている児童生徒の持久力を向上させようとねらった活動である。校庭のみならずスクールバスの駐車場前など、校舎周りを周回（1周約110m）できるコースを設定した。毎回何周走ることができたのかを記録し、100周ごとに全校児童生徒の前で発表し、意欲を高めた。

児童生徒は、何周走る、といった明確な目標を持ち取り組んでいるため、自己記録が出た時などには大きな達成感や満足感を味わうことができていた。また、児童生徒の中には、学期の目標にする子どもも見られたことから、彼らにとって大きな取り組みであったことが窺える。

3. クリケットの教材化

パキスタンではクリケットというスポーツが盛んである。もともとイギリス発祥のスポーツであるが、パキスタ

ンがイギリス領であった時代があることから、現在でも空き地や道路など至る所でクリケットをしている姿を目にする。世界的にもワールドカップで優勝するなどの実績を残す強豪国である。そこで、現地理解という意味も含め、クリケットの教材化を試みた。ただしクリケットのルールはひじょうに複雑なため、かなりの簡素化を図った。

クリケットの特性としては、ボールを打った後、相手がボールを取りに行っている間に、向かい合った場所にいるもう一人の見方選手と息を合わせて走って入れ替わり、点をとるところにある。また、360°どこに打ってもいいため、投球者と反対方向に打つことができるというのも特性である。そこでそれらのルールは、簡素化しても残した。変えたルールとしては、コート広さ、ボールの大きさ、人数、攻守交替の仕方、投球方法などである。また、児童生徒だけではアウトを取ることなどのゲームの進行が難しいと考えられるため、教職員もチームの中に入り、サポートしながらゲームを行った。

児童生徒にとってはまったく新しい教材であるため、実体験としての積み重ねはない。カラチでテレビをつければ必ずどこかの番組がクリケットの試合を放送しているため、テレビで見たことはある、家の前でやっている人たちを車の中から見た、程度のスポーツである。そこでまずは、クリケットのゲームを展開するうえで重要と考えられる場面の練習に取り組んだ。内容やねらいについては下記の通りである。

- ①バッツマンになろうー「打つ」「ラン」の練習を行い、用具の扱い方や運動に必要な技術を知る
- ②アウトを取ろうーどのようにすればアウトになるのか、アウトをとるためにはどのようにすればいいのかを知る
- ③ゲームをしよう①ールールやゲーム展開に触れる
- ④ゲームをしよう②ー攻守に分かれてゲームを楽しむ

これらの学習を通し、パキスタンの文化に触れながら、走っていいタイミングを見つけたり、息を合わせて走って入れ替わったり、また、どこを狙って打つか考えたり、アウトの取り方を考えたりと多くの場面で思考することができた。

4. おわりに

パキスタン、カラチの生活環境を考えた場合、児童生徒が自由に体を動かすということが難しい。そんな中で体育科指導をどのように実践していくか、というのは本校にとって非常に大きな課題であると考えられる。しかし、体を動かす経験が少なくなってしまうからこそ、体育科指導を通して、体を動かすことで楽しさや心地よさを感じることができる、ということをもまずは感じてもらいたいと考える。自分が赴任前に専門として取り組んできた体育科教育について赴任地で新たな実践を行うことができたことを嬉しく思う。

最後になったが、これまで積み上げられてきたことをもとにさらに素晴らしいカラチ日本人学校に発展していくこと、そして本校児童生徒が元気一杯育ち続けていくことを心から願っている。